



# 科学は世界が舞台

## ～学生・若手会員へのメッセージ～

**黒田一幸** Kazuyuki KURODA

日本学術振興会 (JSPS) ストックホルム研究連絡センター センター長, 早稲田大学 名誉教授



1979年4月の日米合同ハワイ年会（その後 Pacifichem となって現在に至る）での口頭発表が、私の最初の海外経験だった。助手になったばかりで、パスポート取得も飛行機搭乗も初めてだった。口頭発表が精一杯で、研究交流の余裕もなかった。その後 British Council Scholarship（残念ながら今はない）による1年間の英国での研究生活や、その後幾度となく国際会議や外国での研究滞在で多くの刺激を受け、様々な交流を積み重ね、共同研究を展開してきた。これらの海外経験は、私の人生に大きな影響を与えてきた。一方、年齢を重ねるにつれて海外渡航の感激が薄れ、感受性の衰えを痛感する。やはり若いときの経験が貴重だ。「いつでも行ける」は、結局行かずじまいになってしまう。

ノーベル物理学賞受賞の Heinrich Rohrer 博士は、2008年にJSPSが主催した第1回 Hope meeting（日本を中心にアジアの若手研究者がノーベル賞受賞者らを囲んで討議する集会）において「科学は世界が舞台であり（Science is really worldwide.）、内向きになってはいけない」と若手に向かってメッセージを寄せられた。「自分なんかはとでも……」と尻込みする人もいるかもしれない。しかし、海外で研究を始めると、研究の本質において異なることは何もない。現在私はストックホルムで生活し、種々の学術イベントに参加する機会があるが、イベントの最後には必ずと言ってよいほどに mingling と呼ばれる交流会がある。イベントの講師や出席者らと談論風発あるいは共同研究の相談など、mingling は情報収集よりさらに重要な将来の研究を左右するかもしれない重要な出会いの場なのだ。メールだけでは相手が信用できるかどうか掴めない場合もあり、やはり対面での議論が信用を生み、研究を加速させる。

海外での研究が数居高く感じられるならば、まずは国内開催でもよいので国際会議に積極的に参加・発表することをお勧めしたい。論文上ではあるものの、多くの外国人研究者をすでにあなたは知っているはずだ。国際的な研究環境を経験する上での第一歩をすでに踏み出しているのだ。次は文献で名前を知る研究者と直接会話してほしい。自分の論文を読んで話しかけてくる人を誰も無下にはしない。

学生・若手会員の中には海外経験を積めと強く勧める指導者をいぶかしく思う人もいるかもしれない。国際的な研究環境で先輩たちが切磋琢磨してきた体験を、若い諸君にも経験してほしいと強く思っていることと理解してほしい。世界の化学系研究室なら、やっていることは大同小異であるからあえて経験しなくてもよいと考えているかもしれない。しかし異国で実際に研究すると、英語で意思疎通することに加え、問題意識、アプローチ、センスなどの違いを感じることができる。異文化体験は自分をさらに成長させる絶好の機会だ。さらに交友関係の拡がりや後の研究を大きく育む契機にもなる。

自分の人生を大切に思う気持ちは誰でも同じだろう。キャリアプランを考えることも当然だ。人生の価値の最大化を図ることは、充実した人生を歩みたいと考える人の共通の想いであり、難しいことでもある。自分の人生をどのように充実させるかという価値観は様々であるのも当然だ。改めて「科学は世界が舞台」と私も強調したい。貴方の決断を世界は待っている！

© 2023 The Chemical Society of Japan